

田村 任頭

<序論>

研究動機・研究目的・研究方法

筆者はハンドボールを始めて10年目になる。しかし、ハンドボールという競技をまだほんの一部分しかわかっていない。大学に来て今までやったことのある戦術や練習の意味や必要性を教わった時、ハンドボールというものの奥深さと楽しさを知り、さらに深めていきたいと感じるようになった。また、ヨーロッパの最新の戦術傾向を取り入れた練習をしていくうちに、知らない多くの戦術が存在しているのだと気付いた。球技において戦術は重要である。研究の動機は、多くの戦術を深く知りたく、またそれらを研究してこれからのハンドボール活動に役立てていきたいと考えるからである。これから先もチームを持ってハンドボールと関わっていきたい。それは、プレイヤーとしてずっとやっていくことも含めて、教員になっても生徒たちに質の高いハンドボールを教えていきたい。本研究では、ハンドボールにおけるチーム戦術の類型化に関して明らかにすることを目的とする。そのための研究方法として、ゲーム観察における自由観察法とフィルム、ビデオによる観察法を用いていきたい。その際に、運動現象の二面的所与性を認識することによって、自分自身の運動の自己知覚に基づく「自己観察」と他者の知覚に基づく「他者観察」を考察法とする、運動モルフォロジーの研究法を用いていきたい。

今回は平成16年度高松宮記念杯（男子第47回、女子40回）全日本学生ハンドボール選手権大会（沖縄県開催）に行き、とりわけ筑波大男子部の全試合をビデオにとってきたものである。それらをモルフォロジーの立場から、印象分析をして類型化していく。

<本論>

第一章 ハンドボール競技の構造的特性

ハンドボールをボールゲームの特性に基づいて考察することにより、ボールゲームとしてのハンドボールを理解することができる。ここでハンドボールの特性と理念に触れ、グループ戦術・チーム戦術についてまとめた。ハンドボールは、ほとんどすべてのゲーム行為は、相手の妨害の下で実行されるのでプレイヤーは優れた先取り能力と反応能力を持っていなければならない。そしてチーム戦術は、個人戦術・グループ戦術・ゲーム戦術の上に成り立っていると考えられる。特に、ゲーム戦術とはその場に応じた戦術である。戦術とは、一般に戦術の用語は、戦闘実行上の方策、一個の戦闘における戦闘力の使用法。一般に戦略に従属。転じてある目的を達成するための方法である。特に、ゲーム戦術とはその場に応じた戦術である。ゲームには流れがあり、またその時々でプレイヤーの好調な時やそうでないときがある。誰を使っていくのか、それに応じた戦術や、相手の弱いところをつく戦術など、ゲームを制するための戦術を指す。それらが一つになってチーム戦術になると考えた。また、戦術に着目することにより、個人から集団までの運動ゲシュタルトを研究対象とすることができる。

第二章 ゲームの運動観察方法

チーム戦術をみていく際には、運動モルフォロジー的考察法で観察していく。この考察法は、スポーツ運動を目を通して外から知覚してだけでなく、体験し、中から知覚することが重要なのである。まさに、他者観察の自己観察化である。この観察には、運動を見抜く力と運動共感能力が大切である。運動経過の特徴を運動記述を用いて浮き彫りにして、マイネルの諸カテゴリーを用いて本質的なものにしていくことを試みた。諸カテゴリーは、個人の運動ゲシュタルトに対するものだが、集団の運動ゲシュタルトを捉えることも可能である。カテゴリーは①運動の局面構造、②運動のリズム、③運動の伝導、④運動の流動、⑤運動の弾性、⑥運動の先取り、⑦運動の正確さ、⑧運動の調和の八つがある。運動によって際立つカテゴリーが違うが、チーム戦術を観察していくにあたり、運動の局面構造、運動のリズム、運動の先取り、運動の正確さ、運動の調和が大きく関係していると考え、これを基に実際に分析を試みた。

第三章 ゲーム戦術の類型化

観察対象は男子筑波大である。その理由として、一つは、全日本インカレを見てきて筑波大が21年ぶりに優勝したことがあげられる。またどのチームよりも、チーム戦術に長けていたのが一目見て分かったからである。もう一つは、筆者が4年間、春に合宿に行き一緒に練習や試合をして戦術をよく知っているからである。そして、全日本学生選手権大会の全試合のビデオの中から典型例を抽出し、それらを大きく七つに類型化した。すなわち印象分析の結果、①センターポジションチェンジ、②左サイド切り、③右45°回り込みシュート、④右45°クロス、⑤ポストと右サイドの平行、⑥センターきっかけ、⑦スカイに類型化することができた。

<結論>

チーム戦術は、個人戦術があって成り立つものであり、また素人にやれといってもできるものでもない。多くの訓練と運動経験が必要である。チーム戦術において、プレイヤーがゲームの構造を理解すること、共通の基盤をもっていることが大切である。基盤というのは、チームの考え方であってそれらはチームに色を出させるものでもある。それらを、発揮することで成り立っていくのがチーム戦術であると考えられる。

チーム戦術というものは、個人を生かすもするし殺すもする。一流のチームプレーというのは、個人が生かしてチームが生きるものである。チーム戦術に固執しているものは、自分のプレーができていないのである。また、チーム戦術に助けられる部分も多々あるのである。個人戦術が対戦するチームより劣っている場合、チームでやることによりその差は補えるのである。

チーム戦術を完璧にこなすのは難しい。ゲーム中は状況が常に変化するからである。しかし、チームでできる戦術は多いほうがよい。それらは、チームを助けてくれる。そして、個人も助けてくれる。よって、指導者にとって、チーム戦術を教えることは欠かせないことなのである。勝てないチームが勝てるようになっていく手段の一つでもあるのだ。

これらをもっと深く分析・考察していくには、個人戦術から少数のグループ戦術、そして全体というように、観察対象を膨らませて分析していけばよいのだと考えられる。

(引用・参考文献省略)